



## 人類学の立場からの問題提起

川田 順造（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）

10月31日に行われた全体研究会で、私は「人類学の立場から」問題提起を試みた。このCOEプログラムの研究テーマが掲げる「人類文化研究のための」という目標は、どのようにして達成できるのかについて、サブリーダーでもある人類学者として、研究計画全体の初期段階で発言すべきだと考えたからである。

### 1 文化の三角測量による人類文化へのアプローチ

人類学の基礎である世界民族誌、人類文化史の初歩的な知識をもつことは、限られた地域で得られた知見を、「人類に普遍的」と即断する誤りを避けるためにも必要だが、少なくとも、「人類文化研究のための」という研究目標で求められている問題意識を尖鋭にもち、「資料のための資料」に埋没することなく研究を進める上で、異なる文化の対比によって、隠れていた問題を発見して行くことが大切である。その一方法として、私が30年余り前から提唱してきた「文化の三角測量」、言語、音文化、身体技法、技術文化、歴史意識など、人類文化のいくつかの領域に適用し、その成果を内外で発表してきた文化比較の方法について、手短かに述べ、批判、教示を受けたい。

文化の比較には、2種のものを大別できる。連続の中の比較と、断絶の中の比較である。前者では、文化における日本と中国の関係のように、影響、受容、拒否など「歴史的」な研究が主となる。後者は、ここで私が取りあげる日本、フランス、西アフリカ内陸社会（特に旧モシ王国）のように、19世紀末まで相互に接触がなく、断絶の中でそれぞれの文化を発達させてきた地域の比較であり、その場合には「歴史的」関係ではなく、文化の根底にある「原理」の発見が研究の主目的となる。断絶の中の比較は、このような比較なしには不明のままの原理を発見するのに資するからである。

地測の場合と同様、3文化を参照点としてとることによって、2文化の相互比較よりも、研究者自身の文化も含む3文化を、他の2文化を参照点として、対象化、相対化することがより容易になる。比較の前提として、例えば私の取りあげた3文化の場合、17世紀初めの中央集権的政治社会の確立から、1960年代の生活文化全体の大変革期

までといった有意の時代幅を設定し、それぞれの文化の具体的な資料から、研究者によって抽出された「理念型」（Idealtypus）としてのモデルの比較を行う。地測と同様、さまざまな文化の研究者の協同で三角測量を拡げてゆくことによって、広汎な人類文化探求の可能性が開けるだろう。

### 2 非文字資料をどのように問題にするか 音の領域

文字との対比で非文字の領域を考察するために、伝達の媒体としての文字の特質をまず考えてみる。言語をベースとすることによる意味の高度の分節化、時間空間における遠隔伝達性、反復参照性、個別参照性、発信・受信における「立ち止まり」の自由さを文字の特質とみる時、音声言語の領域でも文字に近い層（口頭や太鼓言葉〔図版1〕による固定された伝承、など）があり、文字の中でも非文字に近い層（明治の言文一致体文学の創出に大きな役割を果たした三遊亭円朝の口演落語の速記録など、音声言語の仮の固定化など）があることがわかる。

伝達の媒体としての音声言語以外の音（非言語音、器音など）や、それ以外の聴覚の領域（気象音、波音、虫鳥獣の鳴き声などの自然音）、視覚、触覚、味覚、嗅覚や、身体感覚などの領域と言語音の関係、音とそれに人間が与える意味との結びつきについても、上記3文化の対比によって、結びつきの原理と、結びつき方の文化による有意の差異を見出すことができる。文化による音の好悪の違い、音具の選択などは、6に述べる文化における感性全般の領域においても重要な位置を占める。

音声言語を含む声や器音が、政治権力、歴史意識など、文化の他の領域とのあいだにもつ関係、音を担う職能集団の社会での位置（内婚的集団、蔑視・差別、逆に畏敬の対象となる集団、他の職業と結び合わされた集団など）等々、音のコミュニケーションの総体を「音文化」「sound culture」と呼ぶことを私は提唱し、「アフリカの音文化」の研究プロジェクトを8年以来組織して成果を発表してきた。西アフリカに見出される音文化複合の2つのモデル（マンデ音文化とハウサ音文化）と、歴史意識とその表象における2つの指向性（叙事詩と年代記）も、文化の三角測

量の方法によって、日本やフランスとも、正負の対応関係を設定して研究することが可能である。これらのモデルの操作によって、権力と歴史意識とその表象、音文化と文字のあり方の相互関係の原型が浮かび上がってくる。

### 3 非文字資料をどのように問題にするか 図像の領域

文字はアジアの東西で象形記号から生まれたが、西では契約や統計との結びつきを強めて表音性に向かい、東では元来のト占の図像から、社会・文化的な意味をとどめた表意記号としての役割を、表音機能と並行して保ち続けた。このような二方向への図像記号の特化とは別に、アフリカの句の形をした王名を表す斧や杖や床几のような表句記号もあり、言語との結びつきなしに、ミイラから蠟人形にいたる肖像、出来事的情景、自然景観などの視覚情報をもつ指示機能と意味機能、図像と個ノ類との対応関係などが図像資料において問われなければならない。図像と音声言語の結合した「絵解き」も、豊かな非文字資料の一領域である。

### 4 身体技法と技術文化

身体技法、文化によって条件づけられた身体の使い方（身体に内装された記憶<強度に条件づけられた反射的運動連鎖の組み合わせ、継起=通時性、相互連携=同時性）[図版1] 行為伝承として強い持続性をもち、技術や儀礼行為の世代を超えた伝承を確かなものにする。また、モノ（道具、衣、住など）モノと身体、作業姿勢と道具の

使い方[図版2] 育児様式との間には、強い相関がある。

身体技法のうち、人力運搬法、履物などに関連する歩容は、音声言語の性格、「うた」の作り方、音具の奏法などと共に、リズム感覚を醸成し、「調子が合う」「調子が合わない」など、深層の同調感、違和感を生みだす。

身体と道具の関係のうち、梃子の原理・回転原理のあるなしは、足の使用の面で身体技法に大きな差異を生じさせる。身体と道具の関係についての三つの理念型の仮説（ ）内は、理念型を作る基礎として主に参照した地域：(a)道具の脱人間化（フランスなど西ヨーロッパ）(b)道具の人間化（日本）(c)人体の道具化（西アフリカ）を一つの叩き台として、両者の関係のさまざまなあり方を検討してゆきたい。

身体表現による伝え合い、共同感覚言語と身体表現の媒体としての手話、共同で守るマナー、食卓作法、極限としての「茶の湯」の儀礼化された社交的意味。一定の決まりに従って、一緒に身体を動かしたり声を出したりする行為は、共属感覚を昂揚させる。合唱、シュプレヒコール、イスラームのジクルなどはよい例であろう。

### 5 集合的記憶の拠りどころとしての風景、樹や岩、人工記念碑、など

ある自然景観が、「風景」として人間の感性とかかわり、意味をもつ、その意味の生まれる根拠、生業活動、交通（街道など）歴史の痕跡などは、「場」における自然と文化の、文化によって異なるあり方といえるだろう。背景



1 太鼓言葉による王の系譜語り、祖父のかたわらで学ぶ楽師の一族の子。太鼓を打つ手の動きが身体技法として習得され、長い込み入った系譜語りの世代から世代への伝承を、安定した確かなものにする。  
(西アフリカ・旧モシ王国で、1968年川田撮影)



2 北斎漫画とフランスのエピナル民衆版画（いずれも19世紀前半）に描かれた諸職の作業姿勢。日本の職人の低座位と、フランスの職人の、仕立屋（最下段、左から2番目）を除く立位・高座位の違いが対照的だ。フランス語では「あくらをかく」ことを「仕立屋風に座る」と言い（英語も同じ）、この座位が特定の職業に結びついたものであることを示している。



としての風景を描いた宗教画・肖像画、風景そのものを描いた風景画（理想化された風景画、史実的客観的風景画、印象的主観的風景画）なども、その背後にある自然・文化をめぐる意識を探る、貴重な手がかりになる。

集合的記憶の場としての、従って非文字資料としての地域と風景は、それらの資料自体が、時と共に、そしてそこに生きる人々と共に変化する性質をもつ資料である。

## 6 非文字資料の総合された領域

視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚、身体感覚（身体の清潔、着衣と裸体・羞恥、坐り心地、寝心地、身体技法と道具、住居空間）それらの総合された感覚環境のなかに、人間は生きている。感性の総合された結果としての好悪、何を快く、何を気持ち悪いと感じるかの文化による違いは、文化

の基層の性格づけに大きな役割をもっていると思われる。その際、異なる感覚領域間の連合、共感覚 (synesthesia) に注目することが大切であろう。非文字媒体による記憶は、primordial attachment (C. Geertz)「原初的愛着」形成に重要な役割を果たすのではないか。「何を快く、何を気持ち悪いと感じるか」とくに後者の、反射的忌避感覚は文化の性格を深層で方向づける意味をもっているであろう。

嗅覚については、生理学的研究がまだ不十分だが、感覚に与える印象が、漠然としているからこそ、記憶や連想を喚起する力は大きいといえる。香水・香油文化が、日本ではなぜ乏しかったのか、人類諸文化での潔・不潔感の問題、匂いと宗教の関係、神仏との交信の予備的行為としての香料の問題など、この領域でなすべきことは大きい。

## 研究会報告

## S C I E N C E R E P O R T

# 民具という非文字資料から日本列島の古代多民族社会を復原する試み

河野 通明（神奈川大学日本常民文化研究所・教授）

## 1 「日本」そのものを研究対象とすることの重要性

COEプログラムでは「人類文化研究のための非文字資料の体系化」を掲げ、2班では日本・東アジア・ヨーロッパ・アフリカの現地調査をして身体技法の比較研究をすることとしているが、この比較対象とされている日本は、古くからの「東と西」論や近年の東北学の提唱に見られるように実に多様であり、この多様性の根源を探ればおそらくそこに住んでいる人々の民族的系譜が異なるからである。したがってこれまで大工や鍛冶の仕事などについて中国では立って仕事をするのに対して日本ではお尻を地面に付けて胡座で仕事をする指摘されているが、この日本は座位といった場合の「日本」とは絵画資料に記録されやすい中世・近世の首都＝京都近辺のことであって、東北地方や九州ではどうであったが確認されているわけではない。少なくとも靱摺臼の操作については畿内では座位であるが近世の加賀では立位であり、これはさかのぼれば民族の違いに起因する可能性が高いとわたしは見ている。この事実はこれまで知られていなかったし、そういった研究関心はあまり示されてこなかった。しかし畿内と加賀で作業姿勢＝身体技法が異なるとなると、外国と日本を比較する場合、その日本として選んだ

対象の地域の住民は民族的には何系に属するかが問われなければならないし、同時に日本の他地域ではどうかという調査も必要となってくる。しかしながら日本とアフリカの比較といった取り組みにそこまで期待するのは時間的にも調査の手順からも無理なことは明らかで、これは日本と外国との比較をおこなう一方で、同時並行で日本そのものも多様性を研究するのが必要だということであり、そこから新たな展望が開けてくるのであろう。

## 2 日本列島の民族的多様性

日本の歴史、より厳密には日本列島で展開されてきた人類の歴史を模式的にまとめれば、原住民としての縄文系狩猟採集民の世界に外から稲作民が侵入してきた。かれらは稲作の生産力の高さから人口を急激に増やし勢力を伸ばし、やがて統一国家を形成して先住民に言葉や文化を押しつけて同化を迫った。この点では日本の歴史は分かりやすくいえばアメリカ合衆国型であり、ただこの過程が島国という環境で2000余年という長い時間をかけて進行し、かつ先住民も侵入者も同じモンゴロイドであったために、明治初年の段階で北海道を除けば単一言語の単一民族的様相を呈していたに過ぎない。したがって過